

No. 10	提 案 名：田川活性化プロジェクト ～昼は楽しく夜も明るい文化・創造都市宇都宮～
	提案団体名：宇都宮市創造都市研究センター アントレプレナー研究グループ C班
	所 属：宇都宮共和大学 シティライフ学部／作新学院大学 経営学部・人間文化学部／帝京大学 経済学部地域経済学科／文星芸術大学 美術学部
	代 表 者：宇梶 宏海 指 導 教 員：西山 弘泰、春日 正男、渡邊 瑛季
メンバー	佐藤 雅哉、菊地 円樺、安野 巧真、中野 文華、山内 祥輝、碓氷 瑞紀、齋藤 陽夏、趙 志浩

○ 提案の要旨

本提案は、JR 宇都宮駅西口周辺の活性化と賑わいづくりを目指すものである。当地域は、宇都宮市民や来街者が多く訪れる場所である。ところが、東武宇都宮駅周辺エリアに比べ、大勢の人が集い、イベントなどを実施する場所がない。そうしたことから、中心市街地の一体性と回遊性の向上を目指し、宇都宮駅西口を流れる田川に着目し、2021 年 3 月から本格的に田川の利活用に向けた取り組みを、以下を軸に進めた。

- 田川周辺の自治会や事業者、各種団体に加え、田川に関連した様々な団体との連携
- 既存の枠にとらわれない、学生ならではの発想に基づいた田川の利活用策の提示
- 昼も夜も楽しめる利活用策の提示
- 大学生などの若者が学んだり、様々なチャレンジをしたりすることで、アントレプレナーシップを醸成する場所の提供

3 月から 5 月は、宇都宮市内の視察や市役所や事業者、自治会へのヒアリングを行い、当地区の現状や課題の把握を行った。そのうえで、7 月以降、以下のような事業を展開した。

月	イベント	内容
7 月	県補助金採択	「大学地域連携活動支援事業」(60 万円) に採択される
	宵待ち灯ろうの参加	宇都宮大空襲の追悼音楽ライブ&空襲体験講話を実施
	田川美化活動の実施	河川敷に堆積した砂 8 トンを 70 名体制で除去
9 月	短編映画を制作	宇都宮大空襲に関連した短編映画を自主制作
10 月	田川ブリッジシアター開催	10-11 月に幸橋下で映画鑑賞会を計 3 回実施
11 月	学店マルシェ開催	市内高校・大学の連合学校祭「学店マルシェ」を開催するとともに音楽ライブと国体 PR イベントを実施
12 月	イルミネーションを設置	竹灯籠 (150 基) とイルミネーション (2 基) を両岸 150m 設置
1 月	屋台村の実施 (計画中)	キッチンカーや周辺飲食店の協力を得て、屋台村を実施

以上の事業を踏まえ、提案者たちは田川を市民や来街者にとって魅力のある憩いの空間とするだけでなく、市内の高校生・大学生などが集い、学習成果の発表やチャレンジショップ、各種イベントの実施などを通して学ぶ「田川まちなかキャンパス構想」を以下のように提示したい。

- まちなかキャンパスの範囲は、幸橋から押切橋の両岸とする。
- 田川沿いにある空き家を活用し、学生が田川で活動するための支援施設とする。
- 活動拠点では支援員が常駐し、田川活用のアドバイスをするとともに、機材の貸出を行う。
- 河川内や近隣道路においてイベントや設置物を制作する場合の「田川利活用マニュアル」を作成し、学生が容易に田川やその周辺を活用しやすいような環境を整備する。
- 活動に利用する電源は、田川の水力発電によって賄う。
- 活動拠点の運営は、NPO 法人宇都宮まちづくり推進機構などが行う。

以上の取り組みによって、学生の斬新なアイデアから生まれる各種取り組みが展開され、クリエイティブな空間が形成されていく。また、学生同士、学生と市民・企業などとの交流から、新たなビジネスの発信地となり、宇都宮市がより元気に、活性化することを想定している。

1. 提案の背景・目的

JR 宇都宮駅西口地域は「宇都宮市の顔」であり、また玄関口でもある。しかしながら、かつてある週刊誌において「日本一醜い駅前景観」と揶揄されたように、残念ながら宇都宮らしい景観や施設に乏しいのが現状である。一方、宇都宮市における中心市街地活性化における各種施策は、旧市街地エリア（二荒山神社周辺や東武宇都宮駅周辺、宇都宮城址公園周辺）が中心である。JR 宇都宮駅東口の再開発が進む一方で、西口周辺の再開発はほとんど進捗がみられず、LRT の西口方面の延伸計画も正式な発表はない。このままでは、宇都宮駅東口と旧市街地エリアが分断され、中心市街地の一体的な活性化を阻害する恐れがある。東口エリアから西口エリア、バンバ、東武宇都宮駅エリアとつながる確固とした中心軸の形成が求められる。

2023 年には栃木県で「いちご一会とちぎ国体」が実施される。全国から多くの選手や観戦者が訪れるだけではなく、全国の企業、行政が本県の動向に注目している。そうした中で本県の顔である宇都宮駅西口地域の活性化は急務となっている。ハード整備が難しい状況下においては、すでにある資源を活用し、少しでも当地区の活性化につなげることが必要である。また JR 宇都宮駅西口において、観光客や学生や駅周辺の人々が、一息つけるような憩いの場所を作る。そしてコロナ禍で困難を強いられている飲食店の方たちに少しでも助けになるような、イベントを企画し、田川の新たな活用法を提示するとともに、当地区の活性化を目指す。

2. 提案の目標・課題「スマート×風土 うつのみやのデザイン」との関連

宇都宮市のような県庁所在都市において、駅前に田川のような大きな河川があるのは、全国的に少なく、希少性が高い。すなわち、駅前に大きな川が流れているというのは、宇都宮の個性であり「風土」とであると考えられる。また、風土あふれる田川において、イベントを開催することは「宇都宮らしさ」を市民や観光客に印象付けることができ、これもまた風土になる。

一方、本提案は、「スマート」も大いに意識した活動である。以下で紹介する田川ブリッジシアターは、ICT 機器（PC・プロジェクター）を使用して、宇都宮大空襲についての自主制作映画を上映した。また上映会では、栃木日産自動車販売㈱と連携し、電気自動車「リーフ」を借用した。そしてリーフの蓄電池から電力供給を受け、映画上映を行った。今後は、田川による水力発電を実施し、各種イベントの電力を賄いたいと考えている。

3. 現状分析～宇都宮市内各地域の視察やヒアリング～

3.1 JR 宇都宮駅西口周辺エリアの現状と課題

宇都宮市創造都市研究センターは、市内私立 4 大学と宇都宮市、商工会議所、民間企業、NPO などが連携し、宇都宮市の創造都市化を目指すプラットフォームである。学生の斬新なアイデアをまちづくりに取り入れるため、2020 年 9 月に 4 大学の学生が集まり結成されたのがアントレプレナー研究グループである。2020 年 9 月にキックオフイベントが行われたものの、新型コロナウイルス感染拡大等により、実質的に動き始めたのは 2021 年 3 月になってからである。

まず、3 月 9 日に宇都宮駅周辺や LRT 沿線地域の視察を行った。この視察では、宇都宮駅西口地区や田川も視察コースになっており、以下のような現状や課題が明らかとなった。

- JR 宇都宮西口駅前には、宇都宮市の風土を感じさせるような施設や景観がほとんどなく、来街者にインパクトを与えることができず、市民も誇りに感じない
- 大勢の人が集える公共空間がほとんどない
- 田川には遊歩道が設けられているが人通りがほとんどない
- 遊歩道には 2019 年の台風 19 号によって堆積した砂が大量に堆積し、幅員を狭めている
- 宮の橋から西側の大通りには、飲食店はあるが人が集うような集客施設がほとんどなく、多くは通過者である。

- その一方で、特に朝と夕方によくの人が行き交う

3. 2 行政や住民・地権者へのヒアリング・意見交換

当地区の現状や歴史を知るために、4月から5月にかけて、小袋町自治会、JR 宇都宮駅西口地区まちづくり協議会、西口ビル管理㈱、宇都宮市地域政策室にヒアリング調査を実施した。その結果を以下のようにまとめた。

- 江戸時代に田川より東側は、野原になっていて、小袋町（現在の大通り 3 丁目）が市街地のはずれだった。
- 戦後、田川沿いには屋台が並び、北関東でも知られたスポットになっていた。また、花火大会や貸しボートなど、市民の憩いの場として機能していた。
- 一方で、田川はかつて宇都宮大空襲のときに多くの人が飛び込んで亡くなっていることや、1947 年のカスリーン台風でも 11 名の死者を出すなど負の歴史もある。
- JR 宇都宮駅西口周辺の再開発や LRT 西口延伸のためには、地権者や住民、企業などがイベントやまちづくり活動を通して対話をし、機運醸成を図る必要がある。
- 中心市街地の活性化には、商業施設などに加え、イベントが開催できるような公共の広場が重要であり、全国的にその利活用が注目されている。

4. 施策事業の提案

4. 1 田川の歴史を掘り起こす～宵待ち灯ろうと宇都宮大空襲の映画づくり～

(1) 宵待ち灯ろう

提案者らは、2021 年 7 月 12 日に、市内在住の灯作家の鎌田泰二氏主催と協働し、田川追悼ライブの「宵待ち灯ろう」を実施した。このイベントの目的は、1945 年 7 月 12 日の宇都宮大空襲によって亡くなられた方々を追悼ことである 16 時から準備がはじまり、通行者へのチラシの配布、機材の準備を行った。イベントでは、本事業のメンバーの中野が追悼ライブを行った。また、空襲体験者である大野幹夫氏から体験談をお聞きした。

このイベントによって提案者らは、宇都宮の悲慘な歴史を知ると同時に、学生である提案者たちが、この悲慘な歴史を語り継いでいかなければいけないと感じた。また、鎌田氏の指導のもとイベントを実施することができ、イベント実施のノウハウを習得するとともに、地域の方々とのコミュニケーションと信頼関係構築の端緒となった。なお、このイベントでは、下野新聞や NHK をはじめ、多数のマスコミの取材を受け、提案者たちの活動を PR することができた。

(2) 『宇都宮大空襲～未来の平和のために語り継ごう』の制作

上記のイベントに参加したことで、宇都宮大空襲によって多くの人が田川やその周辺で亡くなったことを知ったとともに、空襲の悲劇を語り継いでいる方々の高齢者が進んでいることを知った。提案者たちは、学生が主体となり、宇都宮大空襲についての映画を作成することで、さらに多くの世代、人々に語り継ぐことができるのではないかと考えた。

そこで 8 月 10 日に宇都宮市在住の映画監督鈴木智氏に映画制作について助言を受けた。助言の内容は①撮影方法、②ストーリーの組み方、③構成、④出演者などである。鈴木氏の助言に基づき、担当の宇梶がストーリーを約 2 週間かけて考えた。また宵待ち灯ろうで連携した鎌田氏に出演者についてご助言をいただいた。その結果、宵待ち灯ろう時に空襲体験を語っていただいた大野氏、宇都宮大空襲の物語などの語りべをしている、うつのみやシティガイド協会の有岡光枝氏、そしてピースうつのみや事務局長の佐藤信明氏に出演していただくことになった。

9 月より 3 名の撮影を開始し、ライブスタジオでナレーションのレコーディングなどを行った。また、宇都宮大空襲の悲劇を語り継ぐ取り組みをしているピースうつのみやの代表である田中一紀氏などにヒアリング調査を行ったり、ピースうつのみやが主催するイベントにスタッフとして参加するなどした。さらにオリジナルのバックミュージックを県内で活躍するミュージシャンの田部井とおる氏に制作していただいた。それらを約 2 週間かけて編集し、短編映画『宇都宮大空



動画共有サイト YouTube で公開しています。以下の URL もしくは QR コードからご視聴ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=L23p6bn3qWk>



写真2 制作した映画のQRコードと収録・レコーディングの様子（右）



写真3 県への事前説明と建設業協会への協力依頼

写真4 当日の作業風景

襲～未来の平和のために語り継ごう』を完成させた。なお、この映画は、10月6日18時半からのNHKニュースで約5分の特集番組として大きく取り上げられた。

4.2 自分たちで活動場所を整備する～遊歩道の砂の除去活動～

(1) 企画と準備

田川沿いの遊歩道には、大量の砂が堆積していることが3月に行った視察で明らかになっていた。当エリアでイベントをしようとしても、砂が邪魔になりイベントが実施できない。そこで特に堆積が顕著である幸橋周辺左岸側遊歩道に堆積する砂を除去し、田川の整備を行うこととなった。安野が担当者となり、6月から企画を開始した。

遊歩道の砂の除去には、大勢の人手が必要である。また、地域貢献活動を通して、地域や企業などとのコミュニケーションや信頼関係構築も大きな目的でもあった。そこで小袋町自治会、やなせ田川愛護会、JR宇都宮駅西口地区まちづくり協議会、西口ビル管理㈱、NPO法人まちづくり推進機構に参加を呼びかけた。また、宇都宮共和大学シティライフ学部の実習科目において参加学生を募集し、当日は総勢70名で作業を行うこととなった。

人手の見通しは立ったが、道具がない。また公共空間の砂とはいえ、勝手に持ち出すことはできない。さらに砂をどのように処分するのかも課題となった。そこで田川を所管する宇都宮土木事務所に事前相談に訪れた。そこで提案者たちの要請は以下である。

- ① 砂除去作業の実施許可⇒A4サイズ1枚の作業届と現場の写真、位置図の提出で可能
- ② 除去した砂の処分⇒土嚢袋に詰めた状態ですべて県が引き取る
- ③ 土嚢袋の提供⇒200枚を無償提供
- ④ 遊歩道へのトラックの侵入⇒短時間であれば可能（歩行者に十分注意すること）
- ⑤ スコップの貸与⇒貸し出すほどのスコップがないため不可能

200枚の土嚢袋を県から無償で提供していただいたが、数が足りない。また、スコップも30本ほど必要である。そこで宇都宮市建設部にスコップの貸与について相談したところ、宇都宮市建設業協会と宇都宮市都市基盤保全センターをご紹介いただいた。ご紹介のおかげで、前者から新品のスコップ30本を、後者からは土嚢袋200枚を、それぞれ無償で提供していただいた。土嚢の輸送には、市内の建設会社である陽西建設㈱にご協力いただき、3トンダンプ2台を出していた

だいた。また、提案者たちも2トントラック1台（レンタカー）をチャーターした。

（2）当日の様子と成果

砂の除去は、7月18日（日）に実施した。8時に集合し、簡単な開会式を行った。先述のように、学生55名、地域や企業から15名が参加した。土嚢袋に砂を詰める作業はスムーズに進んだが、15kgにもなる土嚢の持ち運びに苦勞した。当日は35℃の猛暑日が予想されていたこと、マスクをしての作業だったため、作業は困難を極めた。体調不良者が出る可能性もあったことから、11時に作業を終了させた。2時間半ほどの作業で、約8トン（土嚢700個）の砂を除去することに成功した。これにより、場所によっては1mほどしかなかった遊歩道が2m以上の広さになった。3台のトラックに積み込んだ土嚢は、翌19日に県の資材置き場で引き渡しが行われた。

終了後は、作業に参加した団体や個人、資材や機材を提供していただいた団体、企業にお礼のあいさつに回った。

4.3 橋の下をシアターに！？～田川ブリッジシアターの実施～

（1）厄介者を利用する発想の転換

7月18日の砂除去作業では、多くの砂を除去することができたが、遊歩道脇には、まだ砂が残った状態であった。それとは別に、駅前の大型商業施設であるトナリエの西側壁面への映画の投影を企画していたが、交通への妨げや機材調達の難しさから、開催場所の変更を余儀なくされていた。そこで、砂の除去を行った幸橋の下において映画鑑賞会を実施してはどうか？という案が浮上した。左岸側遊歩道からプロジェクターで田川中央部に立つ橋脚に映像を投射し、遊歩道から鑑賞するというアイデアである。橋の下であれば雨にも左右されない。

この映画鑑賞会のポイントは、除去し残った砂を最大限に利用するという点だった。まず歩道脇に残った砂を整形し、ひな壇を作った。これによって前に座っている人を気にせず、映画を鑑賞できる。その次に、観客の座席に砂を利用した。土嚢袋に砂を詰め、それを3つ重ねるとイスになる。しかも良質な川砂のため座り心地が非常に良い。

次にどのような映画を投影するかである。上述の『宇都宮大空襲～未来の平和のために語り継ごう～』を制作中であったため、この映画を上映することとした。また、コンセプトにブレが出てしまうが、立松和平氏作の絵本を動画化した『黄ぶな物語』も後半に上映することにした。

このように、厄介者と考え、除去の対象であった砂を逆に利用し、そこにあるものを最大限生かす発想で映画鑑賞会「田川ブリッジシアター」のプロジェクトが進められることになった。

（2）「田川ブリッジシアター」開催までの経過

当初、田川ブリッジシアターの開催を8月28日としていたが、緊急事態宣言の発令で開催時期が見通せない状況が続いた。まず、行ったことは宇都宮土木事務所への相談である。はじめての試みということで、担当者の方も判断に困った様子ではあったが、本庁河川課などと協議していただき、通常の作業届で処理していただけることになった。幸橋は市道のため宇都宮市が所管であった。たとえ橋脚に映像を投影するだけでも、厳密には市の許可が必要であった。そのため、「利用許可申請」を宇都宮市道路管理課に提出した。

さらに行政関係の手続きは続く。てっきり河川のため、すなわち公道ではないため警察への道路使用許可は必要ないものと思っていた。大きな音が出て、近隣住民や歩行者から万が一警察に通報が入った時のことを考え、宇都宮東警察署に実施について通達を行った。無事に受理され数日が経過した後、東警察署から「公道でなくても、通行者がいるので道路とみなされます。道路使用許可を取ってください」と電話が入った。これにより警察に道路使用許可を申請した。なお、道路使用許可には2,300円の事務手数料が必要である。

最後に行ったのが、周辺住民、企業への挨拶である。午後6時からとはいえ、騒音が発生する。いきなり学生が田川に着目し、いろいろなイベントを開催することに、戸惑う住民やそれを良く思わない方々をいるかもしれない。そこで、音の影響がありそうな周辺の住民や事業所を一軒一軒尋ね、田川ブリッジシアター開催について説明にまわった。すべての方々に快く実施について了承していただいた。また、とても嬉しかったのは、開催についてエールを送ってくださる方が



写真5 第1回ブリッジシアターのチラシ

写真6 第1回の様子

多かったということだ。この挨拶まわりを通して、地域の方々に寄り添った誠意ある対応の大切さを学ぶことができた。

(3) 第1回田川ブリッジシアター

緊急事態宣言が9月で解除となる見通しがついたことから、開催を10月2日に定め準備が進められた。第1回目は7月18日の美化活動に参加していただいた地域や企業の方、学生を招待し、飲物の提供とお土産（軽食）を準備した。これらは幸橋のたもとにあるCafe&Grill Bio Sketch（ビオスケッチ）に提供を依頼した。なお、当店は提案者たちの活動を大いに理解してくださり、以後も様々な場面でご協力をいただいている。

当日の準備は午前10時から行い、周辺の清掃、会場の整地、機材の準備とリハーサルが行われた。事前にプレスリリースをしていたことから、当日は下野新聞、NHK、朝日新聞、産経新聞、読売新聞が取材に訪れていただき、社会的な注目が高いことを感じた。45名の来場者の方々からは「ここを映画館にしようというのは誰も思いつかなかった」「何回も続けてほしい」「映画の内容に感動した」「観客とスタッフとの一体感が感じられた」など、高い評価をいただいた。一方で、9月後半から下流の堰が開門され、幸橋周辺に川の流れが生まれ、音声が開取りづらくなってしまふなどの課題も残った。

(4) 第3回田川ブリッジシアター

第2回は第1回と同様の内容を、一般の参加者を募り実施された。新規の試みとなったのは、第3回である。10月に行われた市政研究センターとの中間打ち合わせにおいて、「水力発電により得られた電力を利用してはどうか？」とのアドバイスをいただいた。また県の補助金に関連した中間報告会において、宇都宮大学国際学部の高橋若菜先生から「連携してもいいですね」とのお話をいただいていた。これらがきっかけとなり、以下のコンセプト、内容により11月13日に第3回田川ブリッジシアターを再び開催することになった。

- 宇都宮大学国際学部と連携し、SDGsに関連した『バレンタイン一揆』というフェアトレードに関連したドキュメンタリー映画を上映し、ディスカッションを行う
- 栃木日産販売㈱の協力により電気自動車リーフをお借りし、リーフからの電力供給により映画を上映する

以上、緊急事態宣言などの影響を受けながらも、10月から11月にかけて計3回の映画鑑賞会を実施することができた。この事業の成果は、誰も思いつかなかった施設や物質を資源として有効活用したこと、そして行政などの各種手続きや周辺住民などの合意形成をクリアした点にある。ある意味では、これらの手続きさえクリアすれば誰でも映画鑑賞会などのイベントを行えるということにもなる。この事業は今後県内の河川を有効活用していくための大きな第一歩であった。



写真7 学店マルシェのチラシ



写真8 当日の様子

4. 4 県内初！河川でマルシェ＆音楽ライブ～学店マルシェの開催～

田川ブリッジシアターと並行して計画されていたのが、市内高校生、大学生の連合学校祭「学店マルシェ」である。ブリッジシアターは、誰も思いつかなかった斬新な方法によって映画上映会を成功させたのに対し、学店マルシェは河川敷で物品販売や音楽ライブを行うという全国で行われている取り組みであり、新しい発想ではない。しかし、栃木県では初の試みということで、行政の判断にも時間を要した。当初9月開催を目指していたが、出水期（水量が多く洪水の危険も高い時期）での開催はリスクが大きいことから、学校祭の時期に合わせ11月6日に開催することになった。なお、県河川課で協議していただいた結果、これも通常の作業届と詳細な配置図、プログラム、緊急時の避難計画のみで実施を承諾いただけることとなった。なお、立案者は菊地であり、菊地がマルシェ担当、中野が音楽ライブ担当となった。

学店マルシェの目的や背景は以下となっている。

- 田川を中心に宇都宮駅前における昼間のにぎわいと回遊性を生む
- 学生の表現や出店の場を創出し、アントレプレナーシップを養成する
- 出店者間、出店者と来客者間、地域との交流を図り、イノベーションの端緒を創出する
- 2019年台風19号からの復興を象徴するイベントにする
- 2022年に開催されるとちぎ国体のPRを行う

先述のように河川内において出店ブースを展開するのは、栃木県では初の試みである。前例がないことから、県庁内でも慎重にご検討いただいた。広く出店者を募るため、大学や高校をまわり、出店者を募った。その結果、宇都宮共和大学、作新学院大学、帝京大学宇都宮キャンパス、文星芸術大学のゼミやサークル、また高校からは、宇都宮短期大学附属高等学校の調理科とパティシエ部、生活教養科に出店いただけることになり、計14店舗が集まった。また、2022年度に開催される国体をPRするためのPRブースも宇都宮市国体局のご協力のもと出店していただいた。

マルシェのみでは、集客力に欠けるとの判断から、音楽ライブを実施することになった。本来であれば、高校生や大学生のライブにすべきであったが学祭時期ということもあり、調整が付かなかったことから、高校・大学関係では文星ジョイントバンド（文星女子高校と文星芸大付属高校）、うつのみやジュニアジャズオーケストラにご出演いただいた。その他、国体イメージソングを歌うシンガーソングライターのサトウヒロコ氏、県内で活躍するpf spiritなどのプロバンドのほか、オーティム6などのシニアバンドにもご出演いただき、若者から中高年まで多彩なバンドの音楽ライブとなった。

音響において特殊な機材、操作が求められることから、西口ビル管理棟内に設置されたラステージ事務局の樋山崇氏に協力を要請した。さらにイベントに利用するテントや机・イスは、各大学・高校から借用し、費用の節減に努めた。

4. 5 まだまだ終わらない田川の活用～イルミネーションと屋台村構想

田川には、まだまだ利活用の可能性が多く秘められている。提案者たちは、12月以降もイルミネーションの設置を進めると同時に、屋台村開設を計画している。

まず、イルミネーションはNP0法人宇都宮まちづくり推進機構が事務局となっている「歴史と光のフュージョンプロジェクト」(委員長：中津正修氏)の事業に組み込んでいただき、竹灯籠150本と3mの大型のクリスマスツリー2基を、幸橋から宮の橋の間の両岸遊歩道にそれぞれ150mにわたって設置することになっている。設置期間が12月上旬から2月上旬までということで、これまでの作業届の範疇を超えることから、占用許可を宇都宮土木事務所に提出した。12月11日の設置を目指し、準備を進めている。

1月以降は、屋台村の設置を目指している。新型コロナウイルス感染拡大状況にもよってくるが、遊歩道に平行する道路沿いにキッチンカーを呼び、遊歩道にテーブルや椅子を並べ、イルミネーションや田川、そして周辺の夜景を見ながら、飲食をしてもらう。当エリアは、4月になると川沿いに枝垂れ桜が咲き乱れることから、新たなお花見会場として整備していきたい。なお、キッチンカーの出店については、宇都宮商工会議所青年部のメンバーに相談しているところである。運営については、宇都宮屋台横丁を運営する(株)村上・代表取締役の村上龍也氏やフードコーディネーター(株)bis・代表取締役)の越石直子氏などにご助言をいただいている。

4. 6 田川を学生の学びと表現の場に～田川まちなかキャンパス構想～

田川の最大の魅力は、宇都宮の顔である宇都宮駅の目の前にあるということである。すなわち市内の高校生や大学生が集まりやすい。そこで、最後に幸橋～宮の橋～押切橋の区間を、市内の高校生や大学生が集い様々な学習活動や自己表現、起業に向けたチャレンジショップをする野外ラボ「田川まちなかキャンパス」を提案する。

(1) 拠点施設の整備と利活用の推進

上記のエリアには、いくつか空き家や空き店舗がみられる。これらについて、所有者から安価に借り受け、支援員を常駐させるかたちで、支援施設を設置してはどうだろうか。ここには田川で利用する道具の保管や貸出も行われる。支援員は、河川の利用についての手引き「田川利活用マニュアル」をもとにアドバイスを行う。施設の運営は、NP0法人宇都宮まちづくり推進機構もしくは、宇都宮まちづくりセンターまちびあなどが行う。

(2) スマートに田川を活用する

本事業でも課題になったのが、電力の供給である。多くの事業では、電力の供給にディーゼル発電機を利用せざるを得ず、「スマートシティ」の観点からはずれてしまう結果となった。また、イルミネーションでは仮設電源(既存の送電線から仮設で電力を引く)を利用している。そこで、田川の流水で電力を作り出す、水力発電の設備を作り、拠点内に設置された蓄電池に電力を蓄積する。その電力を用いて、各種活動を行う。

田川をスマートエリアとするための方策の二つ目は、とん挫してしまったトナリエ西側壁面のプロジェクションマッピングである。ここには主に美大生や美術関係の専門学校生、高校生が制作した作品を常時展示する。また、時には大学生や市民が制作した映画を上映する。光によって宇都宮駅前が彩られ、スマートでクリエイティブな景観が創出される。

(3) 田川を栃木県を代表するクリエイティブエリアに

クリエイティブの源泉は、人が集いしがらみなく考えたことが表現できる場であると考えている。今回の事業を通して、田川にはまだ発想次第でチャレンジできることがたくさんあること、周辺住民や事業者が非常に理解があり、協力的であったことなど、若者が活動する環境が整っている。ここに学生を中心とした各種事業が住民や事業者、行政を巻き込みながら展開されることで、新たなビジネスが生まれる。活動した学生が起業し、田川周辺に事業所を構えるようになる。先述のように当地域は、宇都宮駅に近く、東京や世界各国とのアクセスも至便である。田川のクリエイティブエリアを基点にして、世界と宇都宮(風土)がつながり、宇都宮がよりスマートでクリエイティブな都市への発展していく未来を、提案者たちは構想している。